



Title	英語の時副詞と場所副詞について
Author(s)	舟阪, 晃
Citation	大阪外国語大学学報. 1977, 39, p. 215-234
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80671
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

英語の時副詞と場所副詞について

舟 阪 晃

Time Adverbials and Place Adverbials of English

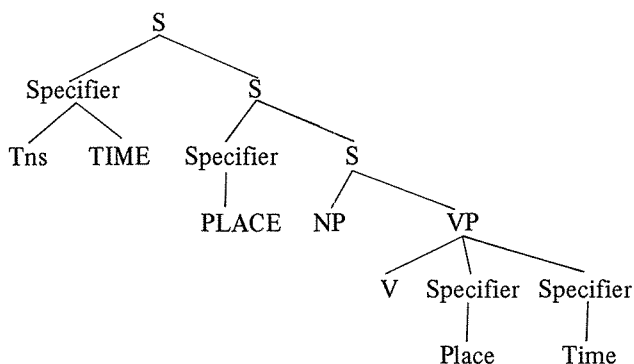
Akira FUNASAKA

This paper aims at (i) specifying the status of these adverbials in the underlying structure, (ii) identifying the conditions of movement of these adverbials in the surface structure and (iii) sub-categorizing them referring to (i) and (ii).

Their status in the underlying structure is established in terms of syntactic cooccurrence restriction and their behavior in the surface is described based on actual utterance, mostly out of the *Time* (1976:May–Aug.).

Our conclusions are:

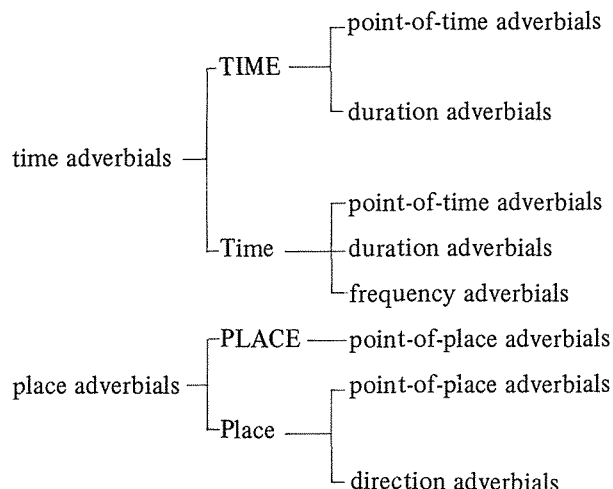
- (i) These adverbials are divided into two: *Sentence Specifier* which has no cooccurrence restriction with the verb and stands outside negative scope and *Verb Specifier* which cooccurs with the verb and lies within negative scope. They are diagramed as follows:



- (ii) As to their movement in the surface the facts below are revealed:
- (a) These adverbials may, as a rule, move without a change of meaning as long as they stay under the node which dominates them immediately.
- (b) They have privilege of occurrence with regard to their place in the sentence, which can be described in terms of figures.

(c) Movement of these adverbials out of the node which dominates them brings about ungrammatical sentences, or, even if grammatical, ambiguous ones or those which carry different meaning from the original ones.

(iii) These adverbials can be subclassified as follows:



まえがき

本稿では、英語の時副詞と場所副詞とについて、つぎのような点から考察を加えるつもりである。(a)基底構造において、これらの副詞はどのような地位をもつか——とくに、他の構成要素とどのような共起制限をもつか、(b)これらの副詞には、表層構造において、どのような動きが許されているか、(c)以上の点から、これらの副詞の下位区分ができるはずであるが、どのような区分が可能であろうか。

1. 時副詞について

1.1. 英語の文法のどのような問題をとりあげるにしても、おおかれすくなかれ、Chomsky (1965) に言及するのが妥当であろう。ここでも、まず、Chomsky (1965) での時副詞の扱いについて概観してみよう。Chomsky (1965) における書き替え規則のうち時副詞に関係があるのは(1)の規則である。

(1) (i) $S \rightarrow NP$ Predicate-Phrase

(ii) Predicate-Phrase \rightarrow Aux VP (Place) (Time)

(iii) VP \rightarrow $\left\{ \begin{array}{l} \text{Copula Predicate} \\ \text{V} \left\{ \begin{array}{l} \text{(NP)(PP)(PP)(Man)} \\ \text{S'} \\ \text{Predicate} \end{array} \right. \end{array} \right.$

(Chomsky 1965: 106–07)

これらの規則から、時副詞について、つぎのような要約が可能であろう。(a) Aux (Tns), VP,

Time は姉妹関係である。(b) Aux (Tns) は義務的、Time は随意的節点である。(c) Time には単純副詞、副詞句、副詞節が含まれる。(d) 方向、期間、頻度の副詞は (iii) 前置詞句(PP) に含まれることになる。このように、一応、時副詞のかなりの部分がカバーされていることになるが、同時に、問題点も多い。そのいくつかを以下で検討してみよう。

まず第一に、Time と VP とは姉妹関係になっているが、共起制限上からいうと両者の間に一貫した制限があるとは思えない。つまり、Time の下にある特定の項目(または、その類)がくることによって VP の生起に制限が加えられることはない。また、Aux (Tns) と VP との間にも同じことがいえる。つまり、Aux が、たとえば、「過去」であるために、VP のある種の類だけが選択され、それ以外は排除されるということはない。一方、Aux (Tns) と Time との間には、いつでもというわけではないが、非常に明確な共起制限があるといえる。つまり、たとえば、「過去」の時制と「過去」の時副詞とは共起できるが、「過去」の時制と「未来」の時副詞とは共起しないわけである。このことから、共起上からいえば、Aux (Tns) と Time とは姉妹関係でよいが、それらと VP とはちがった関係のレベルにあるといわねばならない。

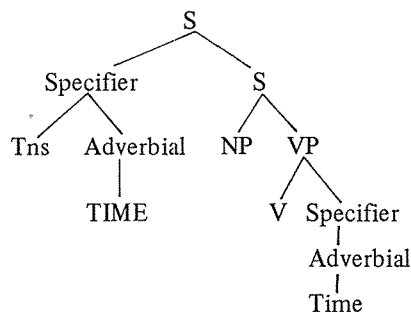
第二に、今問題にした Aux (Tns) と Time との新しい位置であるが、共起制限上からいって、(1 iii) に入る余地はない。また、(1 i) についても、Aux (Tns) や Time と主語の位置にくる NP との間には共起制限が認められないのであるから、(1 i) に入れることもできない。この処置については後述する。

第三に、方向、期間、場所、頻度の副詞は (1 iii) の PP でカバーされているのであるが、共起上からいえば、おおむねこれは妥当であるといえる。なぜなら、これらの副詞と動詞 V とは共起制限をもつからである。しかし、前置詞句の形をとったものしか扱えないということと、すべてが随意的な節点と考えられているということとは問題点として残ろう。

1.2. 指定辞 (specifier) としての時副詞

Chomsky (1965) での時副詞の扱い方についての議論をふまえて、時副詞の位置を (2) のように仮定してみよう。時副詞は文指定辞としての TIME と動詞指定辞としての Time とにわかれる。

(2)



このように時副詞を位置づけると、Tns と TIME との間にある共起制限が示され、同時に、Tns や TIME は、下位の S に支配される構成要素に共起制限を持たないということが明示的に示され

ることになる。Tns と TIMEとの間に拘束的な共起制限がある例を (3) にあげておく。

- (3) (i) I read the diary last night.
- (ii) I will read the diary tomorrow.

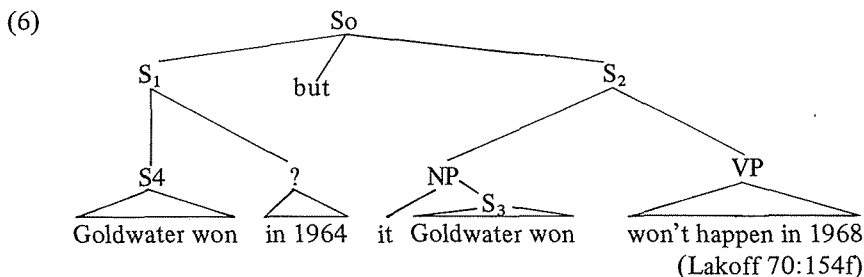
一方、(4)の時副詞は、Tns とは共起制限はまったく持たず、動詞との間に共起制限をもっている。したがって、この時副詞は (2) で明らかなように、V と姉妹関係にある Time という節点として表わされることになる。

- (4) (i) last for three weeks
- (ii) win three times a week
- (iii) *win for three weeks

1. 2. 1. Lakoff における時副詞の扱い方

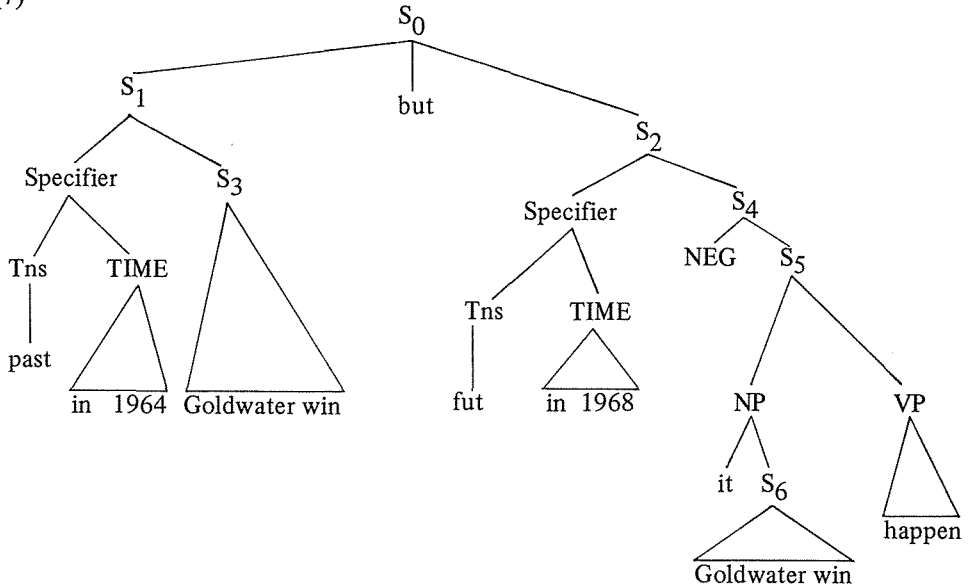
Lakoff の場合、時副詞は上位文の述部であるとし、(5) に対して (6) のような樹状図を与えている。

(5) Goldwater won in 1964, but it won't happen in 1968.



(6) のような基底構造を考えると、(5) における it が都合良く説明できることになる。つまり、S4 と S3 とは同一の構造標識をもっているから、S4 を根拠として S3 を消去することができる。もし、時副詞が、Chomsky (1965) にあったように、Aux や VP と姉妹関係にあるとすれば、(5) における it は説明しにくくなる。この限りにおいて、Lakoff の分析は妥当であるといえるが、時制に関して問題が残る。つまり、S4 と S3 とは過去の時制になっているが、同一性の判定をするときには時制が関与しないということと、S3 が過去形でその上位の述部が未来時制であるのが奇妙であるということから、時制を除いた構造間で同一性を問題にした方がよいように思える。筆者が仮定した (2) では、その点がうまく説明できるし；また、Lakoff ではできない時制と時副詞との共起制限についても説明ができることになる。(6) の図を (2) の仮定のもとで書き替えてみると (7) のようになろう。

(7)

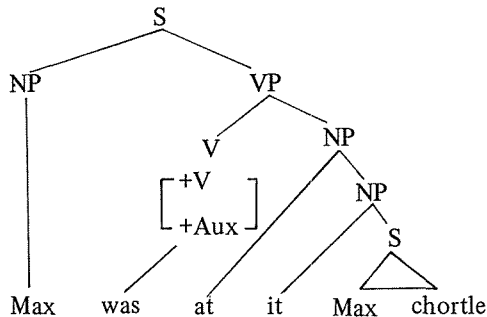


1. 2. 2. Ross における Aux (Tns) の扱い方

Ross (1969)によれば, Auxは上位文の本動詞であり, 時制を除いた文構造の外にあることになる。(8)に対し(9)のような図を与えている。

(8) Max was chortling.

(9)



(Ross 1969: 84f)

時制を担う Aux が基底構造で助動詞であるか, 本動詞であるかは別として, それが, 時制を除いた文構造の外側にあるという考え方は, 共起制限上からいっても妥当なものであろう。しかし, 一方, 上位のSに支配されるNPの地位には疑問が残る。つまり, 共起制限上からいって, このNPだけを上位におく根拠がないからである。

1. 2. 3. 時副詞は時制 (Tns) の先行詞 (antecedent) であるとする立場

McCawley (1971: 111)では, 時副詞が先行詞で, その“pronominal form”が Tns であるとしている。この考え方は, これまでの伝統的な見方と方向が逆であるが, 実際の発話を調べてみる

と、このように主張したくなるような事例にであうことがある。したがって、この考え方をここで検討してみるのも無駄ではないと思われる。McCawley は筆者の知る限り、上記の発言以上に具体的な論証はしていないようであるが、Gallagher がこの線にそってやや具体的な議論をしているので、それについて考えてみよう。McCawley と同じく、Gallagher (1970: 220f) も、時副詞が動詞の時制を予測 (predict) する点に注目し、時副詞は義務的な項目ではないが、いったんそれが選択されたときには時制は義務的に決定されるという。さらに、時制の指定のしかたをつぎのようにのべている (Gallagher 1970: 224)。第一のルールは時副詞の時制を、他の時副詞によって支配されていない動詞に、複写する。第二のルールは時制の指定をうけなかった他の動詞を現在形にする。このような考え方の論拠として、Gallagher は、Tns が Aux に支配されているモデルの場合、Tns はどんな時副詞も選択できることになるが、これは経験的事実に反するとし、(10) を与えている。

(10) The man who answered the telephone was Henry's brother (*last week). (Gallagher 1970: 222)

つぎに、この考え方の批判を試みてみよう。まず第一に、(10) にみられる不都合は、Tns と時副詞との間の類で述べられるような共起制限ではなく、個々の単語のレベルにおける制限であるように思える。(11) が文法的であることからこのことは明らかであろう。

(11) The man who answered the telephone arrived at Tokyo last week.

第二に、時副詞が動詞の時制を指定することになるのであるが、時副詞によっては唯一的に決まらないことがある。たとえば、last week, three years ago, tomorrow などのときは、動詞の時制は唯一的に決まるが、on Saturday, on July 20 などの場合には、動詞の時制は、現在、過去、未来のどれでもよいことになる。第三に、時副詞が選択されていない文においても、動詞の時制は過去、現在、未来になりうるわけであるから、時副詞によって時制の指定をうけない動詞を全部現在形にするというのは不都合である。以上の考察から、McCawley, Gallagher の考え方には賛成できないが、Tns と時副詞との間にある拘束関係に注目している点については評価できよう。

(2) のところで仮定した時副詞の地位に関して、これまでの議論の中で不都合はみつかっていないと思われるので、その仮定にたって、さらに議論を進めていくことにする。

1. 3. 時副詞の下位区分

時副詞と Tns との密接な関係については、すでに指摘したとおりであるが、その関係は一樣ではない。第一に、時副詞により強制的に Tns が決まる副詞、第二に、Tns に対しては無指定であるが個々の動詞とは共起制限をもたない副詞、第三に、Tns とは共起制限をもたずに個々の動詞ともつもの、などが区別できる。(2) で用いた用語で表現するなら、前二者は TIME、後者は Time ということになる。なお、(2) で区別した二つの時副詞は、さらに、時点 (point of time) 副詞、期間 (duration) 副詞、頻度 (frequency) 副詞などに下位区分される。

1. 3. 1. 動詞の時制を唯一的に決定してしまう時副詞 (文尾の T は出所が雑誌 *TIME* であるこ

とを示す)

- (12) When he *succeeded* his mentally afflicted father Taisho *in 1926*, Hirohito stepped onto an idol's pedestal. (T)
- (13) *Last year* Japanese manufacturers *sold* 370,000 cars in Europe, but the Europeans sold only a measly 26,000 in Japan. (T)
- (14) San Franciscan Nick O'Demus, 53, who declined to give his real name, *drifted* into the sexual leather-goods market *nine years ago*. (T)

(12) — (14) の文では時副詞が動詞の Tns を自動的に指定してしまっている。とくに、(13) (14) ではそうである。(12) の場合は、話し手がいる時点によって Tns は変わってくることになり、(13) (14) とはやや性格がちがうといえよう。

1. 3. 2. 時制と共起制限をもたない時副詞

- (15) *On Friday* he *flew* to Jakarta, where he conferred with President Suharto. (T)
- (16) *Eighteen minutes later* controllers *will know*, by signals sent from the lander, if a successful touchdown has been made.(T)
- (17) *During two highly emotional meetings of the Imperial Conference in his steamy air-raid shelter*, Hirohito dropped traditional reserve and passionately argued for capitulation.(T)

(15) (16) は時点副詞、(17) は期間副詞の例であるが、いずれも、これらの時副詞は時制とは共起制限をもたない。しかし、実際の発話では、話し手がどの時点に立つかによって自動的に決まってくるのであるから、時制は内包されているともいえる。また、これらの時副詞は動詞との間に共起制限をもたないし、さらに、否定の領域にも入っていない。以上のことから、(1. 3. 1) と同じく、TIME の中に入るものと考えられる。

1. 3. 3. 動詞の下位区分に関与する時副詞

(2) で用いた用語でいえば Time に属する時副詞で、文全体ではなく、動詞の指定辞として働いている時点副詞、頻度副詞、期間副詞について考えてみよう。

まず第一は、時点副詞であるが、(18) におけるごとく、動詞と共起制限をもち、否定文の場合には否定の領域内に入るような時副詞である。

- (18) (i) His new project starts in September.(T)
- (ii) *His new project starts for two weeks.
- (iii) His new project does not start in September.

なお、文の指定辞としてあらわれる TIME は、動詞と共起制限をもたず、また、否定文の場合にはその領域に入らないから、ここで扱っている Time とは明確に区別されるわけであるが、表面上の形の面からいえば両者とも同じ形をとることがある。たとえば、(18) の in September は TIME にも Time にも入りうるというような場合がある。

第二に、頻度副詞を考えてみよう。

(19) win *three times a week*

(20) *win *for three hours*

(21) (i) He *frequently* asks officials to come by and explain their policies.(T)

(ii) He *frequently* asked officials to come by and explain their policies.

(iii) He *will frequently* ask officials to come by and explain their policies.

(19) (20) から頻度副詞と動詞との間に共起制限があるということがわかる。一方, (21) からは, 頻度副詞と時制との間には共起制限がまったくないということがいえる。

(22) He *doesn't often* speak from notes.

(23) *He *doesn't often* take medicine, but often he does. (Quirk *et al* 1972: 494)

否定の領域については, (22) (23) で明らかのように, ここで扱っている頻度副詞は否定の領域内にあることになる。

最後に, 分裂文における動きを調べてみると, 時点副詞は自由に分裂文の焦点にあらわれるが, 頻度副詞の場合には問題がある。

(24) (i) *It is *frequently* that he loses money.

(ii) *It is *often* that he loses money.

(25) (i) It is *very frequently* that he loses money.

(ii) It is *not frequently* that he loses money.

(iii) Is it *frequently* that he loses money? (Quirk *et al* 1972: 494)

Quirk *et al* によれば, (24) は容認できないが, (25) は容認できるという (Quirk *et al* 1972: 494f)。しかし, (25) についても, ある *native speaker* は良好な反応を示さなかった。Quirk *et al* の判定も時点副詞の場合ほどは良好でなかったようである。このことから, 頻度副詞と時点副詞とのちがいが認知できる。

第三に, 期間副詞をとりあげる。期間副詞はすでにのべたごとく TIME に属する場合と, Time に属する場合とがある。ここでは, 後者の場合を考えることにする。

(26) (i) Washington's celebration will go on *for a week*.(T)

(ii) I work *one hour* and I get one hour's profit from it.(T)

(27) (i) *He cured the patient *for five years*.

(ii) *He dug a hole *for five weeks*. (Huang 1975: 20)

(26) から, 期間副詞と時制との間に共起制限がないことがわかる。また, (27) からは, 期間副詞と動詞とが共起制限の関係にあることが認められる。

以上の考察を通して, 動指の指定辞としての副詞は時制とは共起制限をもたないが, 動詞との間にはそれを持つことが明らかになった。これらの点から TIME と Time が区別され, 両者のちがいは, (2) のように位置ずければ, 明示的に示されることになる。

1.4. 時副詞の移動について

基底構造では、共起制限をもとに、時副詞の位置が決められるわけであるが、それ以後、移動変形によっていろいろの表面上の位置をとることが許される。ここでは、移動の際の規制について検討してみたい。まず、Rossによれば、副詞の移動はつぎのように形式化されるという(Ross 1967: 168)。

$$(28) \quad SD: X - [+Adverb] - Y$$

$$SC: \quad 1 \quad 2 \quad 3 \longrightarrow$$

$$\quad \quad 2+1 \quad 3$$

この規則の適用に際しては、副詞は文境界を越えてはならないとしている。たとえば、(29 i) に対し、(29 ii) は時副詞が文境界を越えていないので容認できるが、(29 iii) はその条件を破っているため容認できないことになる。

- (29) (i) I promised that he would be there tomorrow.
 (ii) I promised that tomorrow he would be there.
 (iii) *Tomorrow I promised that he would be there. (Ross 1967: 168)

(29)に関する限り一応これで説明がつくが、他の副詞を考えた場合さらにこまかい規制があることがわかる。その点 Huang (1975)の方がよりこまかい条件をあげている。つまり、Huangによれば、[+ transportable] という素性を指定された副詞は樹状図のどこにでもあらわれうる。しかし、その副詞を支配する節点をこえて動いてはいけないという条件がついている。(29)のtomorrowについて、もし筆者の提案した(2)が認められるなら、tomorrowは文の指定辞ということになり、Huangの条件はRossの条件をカバーし、さらに、Rossの条件でカバーできない副詞についても規制を加えることができる。よって、筆者は、副詞が動くときには、「その副詞を支配する節点を越えてはいけない」という条件を重視したいと思う。つぎに、われわれはEmonds (1970)に言及し、異なった観点からこの問題を考えてみよう。Emondsによれば、root変形というのは、変形操作の対象になる構成要素が派生構造のrootによって直接支配されている構成要素を動かす変形のことである(Emonds 1970: 6-7)。いいかえれば、rootに直接支配されている構成要素が、同じ意味をもって、表層構造の二つ以上の位置を占めるなら、それはroot変形であるということになる。筆者の(2)の図式でいえば、Tnsと姉妹関係にあるTIMEはrootに近いものであるといえる。一方、Chomsky (1965)のTimeは意味を変えずに文頭に出ることができる、つまり、root変形の条件をみたしうるのであるが、Timeはrootに直接支配されていないためにroot変形の中には入らないことになる。結論的にいえば、Chomsky (1965)のTimeの位置づけは妥当でないといえる。

以上の議論をふまえて、時副詞の移動の際おこる問題のいくつかを実例をみながら考えてみよう。「移動」という用語を使った場合、出発点の位置はどこかという疑問が生じるが、これは、もちろん、共起制限をもとに決められた(2)の位置である。個々の例をあげるまえに、移動の結果生

じる影響をまとめておこう。

- (30) (i) 文法的で、意味のちがいがなく、あいまい性もない文が生じる。
- (ii) 非文法的な文が生じる。
- (iii) 文法的ではあるが、意味のちがいが生じる。
- (iv) 文法的ではあるがあいまいさが生じる。

1. 4. 1. 時点副詞の移動

- (31) (i) My oldest brother went to California as a wetback *in 1966*.(T)
- (ii) *In 1966* my oldest brother went to California as a wetback.
- (32) (i) Thevis claims he sold his porn empire for \$5.7 million *last year*. (T)
- (ii) **Last year* Thevis claims he sold his porn empire for \$5.7 million.
- (33) (i) *In the morning*, if John is told to walk, then he walks.
- (ii) If John is told to walk, then he walks *in the morning*. (Thomason-Stalnaker 1973)
- (34) *John, at 6:00, will lose his wallet. (Jackendoff 1972: 95)

(31) の *in 1966* は、動詞と共起制限をもたず、また、否定の領域の中にも入っていないので文に対する指定辞であるといえる。この種の副詞の場合、もっとも普通の位置は文頭と文尾であり、移動の結果、意味のちがいを生じない文法的文がでてくる。Emonds の用語を借りれば *root* 変形の一つということになろう。(32) の場合、問題の時点副詞は文指定辞であるが、それを支配している節点 S を越えて移動したために非文法的な文を生じたことになる。(33) の場合、(33 i) の *in the morning* は、文指定辞と考えられるが、(33 ii) のそれは VP の領域内にあると考えられるので動詞の指定辞であることになる。したがって、(33 i) と (33 ii) の意味はちがうといえる。(34) は Jackendoff (1972) の例文であるが、単文の中でも、生起する場所に規制があることがわかる。このような表層上の生起に関しては実際の発話を調べてみると一応の規則性がわかるわけであるが、筆者の調査(雑誌 *TIME* May–Aug., 1976) では、(34) のような例はかなり発見されている。(35) に時点副詞が生起した位置と回数とを示しておこう。(36) はその実例のいくつかである。

- (35) #160 NP 39 Aux 6 V (NP) 21 X 132 #
- (36) (i) *In 1920 Scientific American* published proposals for signaling Mars with a system of searchlights and heliographs.(T)
- (ii) Sony *recently* opened an assembly plant in South Wales.(T)
- (iii) President Nixon *in September* had ordered the CIA “to play a direct role in organizing a military coup in Chile to prevent Allende’s accession to the presidency,”.....(T)
- (iv) Miki let it be known that he thinks that the Lookheed affair could *now* be over by September.(T)
- (v) Ford was to return *on Dec. 8 to* Washington and all the problems he had left behind.(T)

- (vi) The error was theoretically impossible, but something like it happened again *last week*.(T)

これらの資料からみたと、主語の NP と Aux との間に入る時点副詞はまれではなく、むしろ Aux と V との間の方が生起数はすくないといえる。なお、目的語の NP と先行する動詞との間にあらわれる例は発見できなかったし、また、主語や目的語等の NP の中にかい入してくる例も皆無である。

1.4.2. 頻度副詞の例

- (37) (i) Sailors drink rum *often*.
 (ii) $\left\{ \begin{array}{l} \text{Often sailors} \\ \text{Sailors often} \end{array} \right\}$ drink rum. (Quirk *et al* 1972: 496)
- (38) (i) *Often* he doesn't take medicine, but *often* he does.
 (ii) *He doesn't *often* take medicine, but *often* he does. (*Ibid.*, 494)
- (39) (i) She *regularly* cooks the meal.
 (ii) She cooks the meal *regularly*. (Nilsen 1972: 142)

頻度副詞は VP に支配されている動詞指定辞であるから、VP の節点より外に出た場合は、非文法的な文が生じるか、文法的であっても意味のちがいを生じた文が作りだされるか、のどちらかである。Quirk *et al* (1972) によれば、(37 i) の *often* は *on many occasions* の意味で、(37 ii) の *often* は *it often happens that* の意味であるという。また、(38 i) の例文からは、文頭の *often* は否定の範囲に入っていないが (38 ii) のそれはその範囲に入っていることがわかる。このことから、(37 i) (38 ii) の *often* と (37 ii) (38 i) の *often* とは意味がちがうといわざるをえない。Emonds は頻度副詞は副詞が入りうるすべての位置 (文頭を含む) にあらわれうるのであるから、頻度副詞の移動は *root* 変形であると考えている (Emonds 1970: 124) ようである。が、筆者の考え方からすれば、移動と意味の変更とが対応しているので、いわゆる *root* 変形とは認めがたい。なお、文指定辞と頻度副詞とのちがいはつぎの点にある。つまり、前者は意味をかえずに文頭に立つことが可能であるが、後者は、文頭に立つときにはかならず意味が変わるという事実による。(39) は Nilsen の例であるが、(39 i) の *regularly* は頻度副詞であるが、(39 ii) のそれはあいまいで、頻度副詞のこともあれば様態副詞のこともある。表層上の頻度副詞の生起状態は (40) のとおりである。(41) はその実例である。

(40) # 5 NP 13 Aux 6 V 2 X 8 #

- (41) (i) *Sometimes* Korean VIPs come to Los Angeles and they go to eat at a Japanese or Chinese restaurant, so that is why I built this place.(T)
 (ii) Japanese *infrequently* see the Emperor in public or on TV.(T)
 (iii) The new immigrants do *occasionally* talk of getting rich, but they know that this is

no longer a land of gold rushes and oil strikes.

(iv) The tattered shades flap *occasionally* in the 90 degree heat.(T)

(v) “If the President had his way, we’d have a nuclear war *every week*,” Kissinger *sometimes* claimed.(T)

頻度副詞の起り方については、資料が少ないので確定的なことはいえないが、(40)に関する限り、Nilsen の指摘通り NP と Aux との間が最もふつうの位置であるといえる。それにつづく位置は文尾である。これらの結論は Quirk *et al* (1972:491) の結論とも一致する。なお、V の後の位置の生起数は少くないということと、文尾でない目的語の NP のあと、つまり、NP ___ X# の場所に生起している例は一例もないということに注意しよう。

1. 4. 3. 期間副詞について

(42) は期間副詞の生起数、(43) は実例のいくつかである。

(42) #22 NP 2 Aux 1 V 3 X 51 #

(43) (i) *During two highly emotional meetings of the Imperial Conference in his steamy air-raid shelter*, Hirohito dropped traditional reserve and passionately argued for capitulation.(T)

(ii) *In the 1950s* Michael G. Thevis was part owner of a busy Atlanta newstand.(T)

(iii) The revival of doubt about that day in Dallas stems mainly from what Americans have *since* learned about their government.(T)

(iv) Here he lives *for months* in a furnished room.

(v) Simonson had been puzzling over the hydrogen clouds radio signals *for several years*.(T)

(vi) Washington’s celebrations will go on *for a week*.(T)

文指定辞としての期間副詞は (43 i) (43 ii) にみられる。これらの場合、期間副詞は動詞と共に起制限を持たないし、また、否定の領域にも含まれない。(43iii) 以降は動詞指定辞の例と考えてよいであろう。表層上の生起のしかたについては、資料の数がすくないので確定的なことはいえないが、文頭、文尾が圧倒的に多いということはいえよう。(43) の例文をみても明らかのように、期間をあらわす副詞は前置詞句になることが多く、文構造の中には入りにくいためであろう。文構造の中に入りうるのは単純副詞かごく短い前置詞句に限られる。

1. 5. 二つ以上の時副詞の生起について

これまでは、一つの文の中に一つの時副詞がでてくる場合のみを問題にしたのであるが、場合によっては二つ以上の時副詞が単文中にあらわれることがある。このようなときに、どのような規制があるかを考えてみよう。

1. 5. 1. 二つの時点副詞

(44) (i) I’ll see you *at nine on Monday*.

- (ii) *On Monday I'll see you at nine.*
- (iii) **At nine I'll see you on Monday.* (Quirk et al 1972: 486)
- (iv) *I'll see you at nine.*
- (v) *At nine I'll see you.*

(44 i) では二つの時点副詞が連続してあらわれている。この場合、外側の時点副詞の方が内側のそれより意味領域が広いといえる。もしこの考え方が正しいなら、(44 ii) (44 iii) から、文尾よりも文頭の方が構造上外側の位置であることになる。(44 iii) が非文法であるのは、意味領域の広い方の副詞が狭い副詞より構造上内側の位置をしめているからである。(44 iv) (44 v) と比較してみると、この種の規制は時副詞が二つ (以上) あらわれたときのみ問題になる規制であることがわかる。

文尾に二つ以上の時副詞が連続してでる場合は (45) にみられるごとく外側の副詞の方が意味領域が広いといえるが、文頭の場合は、(46) のように規制はゆるくなる。

- (45) (i) *Thus when she suddenly felt weak as she sat reading on a patio one afternoon last week, it was typical of Pat that she complained to no one.*(T)
- (ii) *The first ominous rumblings were heard in Peking at 3:40 on a rainy, wind-blown morning last week.* (T)
- (46) (i) *There, on July 4 at about 9:40 p.m. the Viking 1 lander is scheduled to touch down at one end of a huge canyon in a region named Chryse and begin the search for life on Mars.*(T)
- (ii) *Then, at 6:20 p.m., on Independence Day, the lander, encased in a protective aeroshell, will be detached from the orbiter.*(T)

1. 5. 2. 二つの頻度副詞

- (47) (i) $\left[\begin{array}{l} \textit{Each day} \\ \textit{Daily} \end{array} \right]$ she felt his pulse $\left[\begin{array}{l} \textit{hourly.} \\ \textit{each hour.} \end{array} \right]$
- (ii) * $\left[\begin{array}{l} \textit{Hourly} \\ \textit{Each hour} \end{array} \right]$ she felt his pulse $\left[\begin{array}{l} \textit{each day.} \\ \textit{daily.} \end{array} \right]$ (Quirk et al 1972: 492)

頻度副詞のときも、時点副詞と同じく、意味領域の広い副詞が文頭に、狭い方が文尾にくることがわかり、文尾よりも文頭の方が構造上外側であるということがわかる。

1. 5. 3. その他の組みあわせ

- (48) (i) *Even now, with no direct transportation between Cuba and the U.S., some 300 refugees, many of them old and sick, fly to Madrid every week.*(T)
- (ii) *He wrote frequently in 1960.*(T)
- (49) *Even in the Hitler era, when millions needed a sanctuary, the U.S. admitted only about 115,000 refugees from Nazi Germany throughout the 1930s.*(T)

(48)からは、頻度副詞よりも時点副詞が構造上外側の位置をしめ、(49)からは、期間副詞よりも時点副詞の方が外側をしめていることがわかる。

2. 場所副詞

時副詞についての議論はここまでとし、つぎに場所副詞を、同じ方法論を用いて、検討してみよう。

2.1. Chomsky (1965)

すでに(1)のところで示したように、Chomsky (1965)では場所副詞は *Place* という随意的節点として、*Aux.*, *VP*, *Time* と姉妹関係におかれている。これについても、時副詞についてしたのと同じ議論ができる。第一に、*Place* は *Aux (Tns)* と共起制限をもたない。筆者の立場からすれば、*Aux (Tns)* と *Time* とは共起制限をもち、姉妹関係にあるのであるから、*Time* と *Place* とは共起制限のレベルがちがうということになる。第二に、場所副詞の中には、共起制限上、三つの下位区分が考えられるが、*Place* という一つの節点ではそれらをカバーしきれない。

つぎに、場所副詞の下位区分を試みてみよう。

- (50) (i) *In Japan*, the Bicentennial is almost as popular as baseball.(T)
(ii) *In Hong Kong* I never get a chance to save money and become my own boss.(T)
- (51) (i) *In that restaurant*, if John is asked to wear a necktie, he wears a necktie.
(ii) If John is asked to wear a necktie he wears a necktie *in that restaurant*.
- (52) (i) John put the gun *on the table*.
(ii) I set the machine *behind the wall*.

第一に、(50)から、動詞と共起制限をもたず、また、否定の領域に入っていない場所副詞が認められる。時副詞のときに使った用語でいえば、文指定辞としての場所副詞である。第二に、(51i)と(51ii)とは意味がちがう、つまり、場所副詞の作用範囲がちがうということを根拠にして、文指定辞でない場所副詞が(51ii)に認められる。つまり、これは動詞指定辞としての場所副詞である。第三に、(52)であきらかなように、動詞の下位区分に関与し、しかも義務的にその存在が要求されるような場所副詞が区別される。

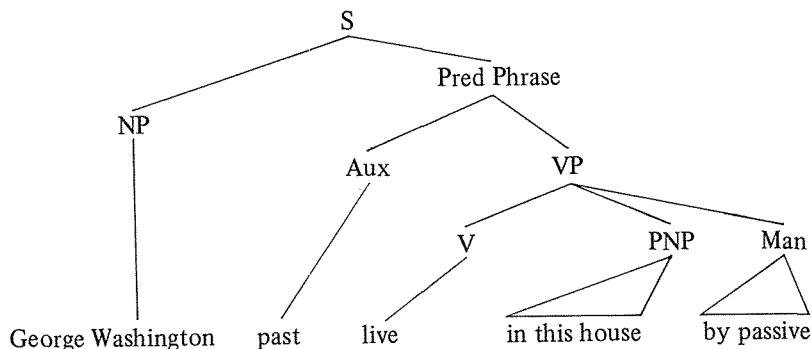
第一と第二の場所副詞の区別を、さらに、つぎの例を使って説明しよう。

- (53) (i) George Washington lived in this house.
(ii) This house was lived in by George Washington.
- (54) (i) George Washington lived in Virginia.
(ii) *Virginia was lived in by George Washington. (Langendoen 1970: 159–160)

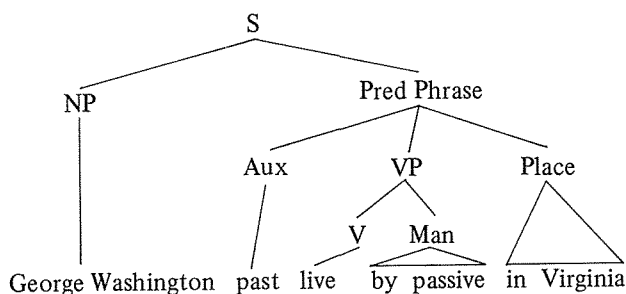
(53ii)は文法的であるが、(54ii)は文法的でない。これらのちがいは二つの場所副詞の共起上のちがいにもとづいて説明できる。(55)(56)で明らかのように、(53i)の場所副詞は動詞指定辞であり、(54i)のそれは文指定辞と考えられる。なお、(55)(56)の構造記述の方式は

Chomsky (1965) にしたがうものとする。

(55)



(56)

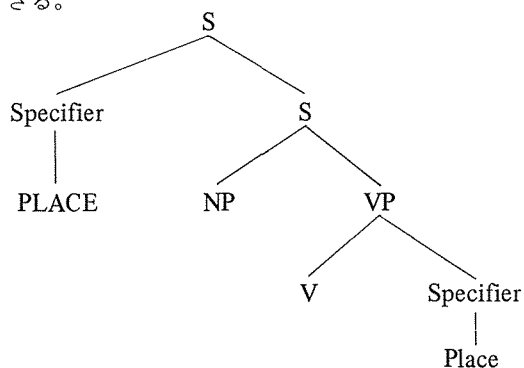


これらの樹状図から明らかなように、(55)は受動変形に関して適正な分析が与えられているが、(56)はそうでない。この事実を根拠にして、場所副詞にすくなくとも二つの種類が認められる。

2.2. 指定辞としての場所副詞

以上の議論をふまえて、時副詞のときと同じように、場所副詞を、文に対する、また、動詞に対する指定辞と考えることができる。

(57)



さらに、場所副詞は、点としての場所をあらわす位置副詞と、方向をあらわす方向副詞とに区分される。方向副詞は、(58) (59) であきらかなように、動詞の下位区分に関与し、否定の領域の外には出られない。いいかえれば、文指定辞にはなりえない副詞である。

(58) (i) He didn't walk *across the park*.

(ii) **Across the park* he didn't walk. (Quirk *et al* 1972: 479)

(59) (i) The soldiers didn't march *toward the fort*.

(ii) **Toward the fort* the soldiers didn't march. (Quirk *et al* 1972: 479)

2.3. 場所副詞の移動

場所副詞の移動については時副詞と同じことがいえる。つまり、場所副詞は、それを支配する上位の節点から外に出ない限り、原則として移動できる。それに違反したときは、非文法的な文や、文法的ではあるがあいまいな文や意味のちがった文を作りだすことになる。上記の条件に違反しなくとも、いろいろ生起上の規則があるがそれについては実際のデータについて調査した結果をあげておこう。まず、位置副詞については(60)のような数字がえられた。

(60) # 50 NP \emptyset Aux \emptyset V 2 X 190 #

時副詞の場合と対照するとあきらかであるが、分布が文尾、文頭にかたよっている。動詞の後で X の前、つまり、文尾でない位置の生起は(61)のように、特別の場合で、場所副詞を文尾に持ってくるには X が長すぎる、また、意味の変化が生じるなどの理由によるものである。

(61) (i) Yet they do see *on the distant shore line of America* something that many Americans take for granted, or even forget they possess—freedom.(T)

(ii) A high-ranking CIA officer named Desmond Fitzgerald was meeting *in Paris* with a Cuban secret agent.(T)

方向副詞については、(62)のような生起数が記録された。方向副詞は VP に支配される副詞であるから、本来、VP の外には出られないのであるが、文頭にあらわれる例が三例あった。しかし、(63)にあげたごとく、文頭の方向副詞は位置副詞の意味あいをもつているといえる。

(62) # 3 NP \emptyset Aux \emptyset X 118 #

(63) (i) Though his trip abroad reaffirmed the Asian initiative undertaken by the previous Labor government, *in almost every other direction* Fraser has served notice that he intends to reshape the foreign policies of his predecessor, Gough Whitlam.(T)

(ii) Farther *down the New England coast*, perhaps the nation's longest and oldest July 4 birthday party will take place in Bristol, R.I.(T)

最後に、二つの場所副詞が一つの文中にあらわれる場合に言及しておこう。

(64) (i) *In Germany*, there have been rodeos *in Düsseldorf* and rock concert *in Berlin*.(T)

(ii) **In Düsseldorf*, there have been rodeos *in Germany* and rock concert *in Berlin*.

(iii) There have been rodeos *in Düsseldorf* and rock concert *in Berlin in Germany*.

(64)をみれば、位置副詞については、時点副詞と同じことがいえる。つまり、意味的範囲の広い方が構造上外側をしめる。文頭の位置が構造上一番外側で、文尾がそれにつづく。

(65) (i) Some of the children are walking *to the lake in the park*.

(ii) *In the park* some of the children are walking *to the lake*.

(iii) **To the lake* some of the children are walking *in the park*. (Quirk *et al* 1972: 475)

(65) では位置副詞と方向副詞とが共存しているが、この場合は、位置副詞の方が構造上外側にくることがわかる。(65iii) を非文法的であるというのはいいすぎで、正確に言えば、「文法的ではあるがふつうでない」ということになる。ある *native speaker* は「詩的な」ひびきがあるという反応を示した。

3. 時副詞と場所副詞との関係

時副詞と場所副詞について同じ手順で分析を試みてきたのであるが、最後に、両者の関係について考察してみよう。時副詞と場所副詞のどちらが構造の外側（または内側）の位置をしめるかは、共起制限上では積極的に決めることはできない。しかし、文指定辞としての時副詞、場所副詞の場合、時副詞と時制とは一つの組をなすが、その組と場所副詞とは構造上のレベルがちがうということは注意されねばならない。それはさておき、表層上の両者の動きをみても、時副詞よりも場所副詞の方が構造上内側であると思われる根拠がある。その根拠の第一は、(66) (67) にみられるごとく、場所副詞の方が時副詞よりも名詞性が強いということである。

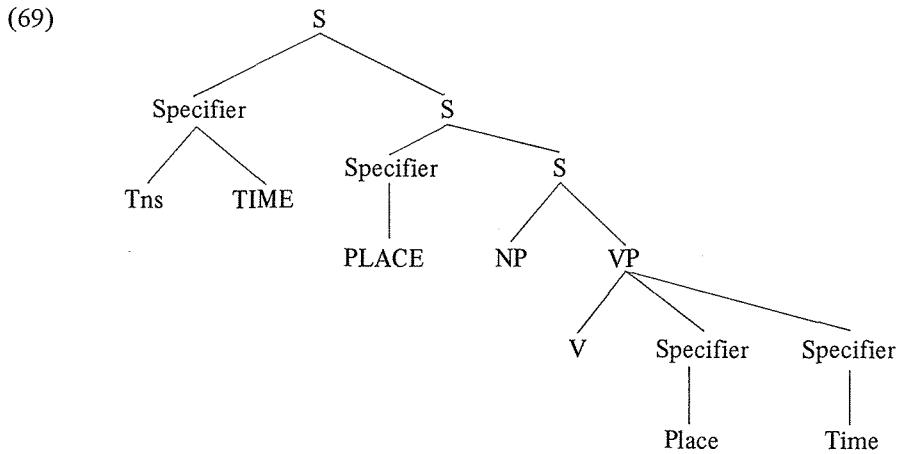
- (66) (i) John sleeps on this sofa.
 (ii) This sofa is slept on by John.
 (iii) This is the sofa John sleeps on.
- (67) (i) John sleeps on Monday morning.
 (ii) *Monday morning is slept on by John.
 (iii) *This is the Monday morning John sleeps on. (Seuren 1969: 100)

第二に、表層構造上、場所副詞と時副詞とが共存するときは、時副詞の方が構造上外側の位置をしめるということがある。筆者が調べた資料ではつぎのような分布がみられた。右端の数字は生起数である。

(68)	文 頭	文 尾	生起数
(i)	時副詞	場所副詞	26
(ii)	場所副詞	時副詞	1
(iii)		場所副詞・時副詞	38
(iv)		時副詞・場所副詞	17
(v)	時副詞・場所副詞		1
(vi)	場所副詞・時副詞		2

(68 i) (68 ii) から上記の結論がえられる。(68iii) (68iv) からは、文尾の場合、時副詞の方が場所副詞の内側にくることがかなりあることがわかるが、生起数をみれば、これも上記の結論を支持しているといえる。(68v) (68vi) は文頭の例であるが、資料が少ないために、この事実は上記の結論を否定も肯定もしない。しかし、二種の副詞が連続して文頭にあらわれるのは、文尾の場合よりは、はるかにまれであるといえよう。

以上の観点から、時副詞と場所副詞の相対的關係を共起上から決定することはできないが、表層上の動きをみることによって、場所副詞の方が時副詞より構造上内側の位置をしめるといえる。結論として(69)をあげておこう。



4. あとがき

これまでの議論をかんたんにまとめておこう。

対 象：英語の時副詞と場所副詞

問 題 点：(i) 基底構造における両副詞の地位

(ii) 表層構造における両副詞の移動の条件

(iii) (i)(ii)を根拠にした両副詞の下位区分

分析方法：(i) 基底構造面では統語上の共起制限を中心として

(ii) 表層構造面では実際の資料上の生起にもとづいて

結 論：(i) 基底構造での両副詞の位置は(69)で与えられる。

(ii) 表層構造における両副詞の移動の条件はつぎのとうり。

(a) 問題の副詞はそれを直接支配する上位の節点の外にでない限り、同じ意味を維持しながら、原則として、移動できる。

(b) (a)の条件をみたしていても、生起上、副詞によりパタンがあり、これは数字で表現をせざるをえないような性質のものである。

(c) (a)の条件に反するときは、非文法的な文になったり、文法的であっても、意味のちがう文やあいまいな文になる。

(iii) 両副詞は以下のように下位区分される。



残された問題

- (i) 本稿の議論の中で、文頭の位置にくる項目は、「動詞と共起制限を持たず、また、否定の領域にも入っていない」という記述がしばしばでてくるが、この現象は時副詞、場所副詞に限ったことではなく、もっと広い観点から、文頭の位置についての特殊性を検討してみる必要がある。
- (ii) (i)にも関連するが、しばしば用いてきた「否定の領域」については、大きな問題であるので稿を改ためねばならない。
- (iii) 両副詞の表層上の動きについては、雑誌 *TIME* を用いて調べたのであるが、強調、対照、その他文体上の問題がからんでくるので、より広い範囲から資料を集め、文体上のテーマとして考察することができよう。

(1976年9月10日)

BIBLIOGRAPHY

Chomsky, Noam (1965): *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT.
 Emonds, Joseph E. (1970): Root and structure-preserving transformations, reproduced by IULC.
 Fillmore, Charles & D. Terence Langendoen (eds.) (1971): *Studies in Linguistic Semantics*, Holt, Rinehart and Winston, Inc.
 Gallagher, Mary (1970): Adverbs of time and tense, in *6th CLS*, 220–225.
 Huang, Shuan-Fan (1975): *A Study of Adverbs*, Mouton.
 Jackendoff, Ray S. (1972): *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT.
 Jacobs, Roderick A. & Peter S. Rosenbaum (eds.) (1969): *Readings in English Transformational Grammar*, Waltham.
 Lakoff, George (1970): Pronominalization, negation, and the analysis of adverbs, Jacobs-Rosenbaum, 145–165.
 Langendoen, Terence (1970): *Essentials of English Grammar*, Holt, Rinehart and Winston.
 McCawley, James D. (1971): Tense and time reference in English, in Fillmore-Langendoen (1971).

- Nilsen, Don Lee Fred (1972): *English Adverbials*, Mouton.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, & Jan Svartvik (1972): *A Grammar of Contemporary English*, Longman.
- Ross, John Robert (1969): Auxiliaries as main verbs, in W. Todd(ed.)(1969).
- Ross, John Robert (1967): Constraints on variables in syntax, MIT Ph.D. Dissertation.
- Seuren, Pieter A. M. (1969): *Operators and Nucleus*, Cambridge University Press.
- Thomason, Richmond & Robert C. Stalnaker, (1973): A semantic theory of adverbs, *LI* 4, 2, 195–220.
- Todd, William (ed.) (1969): *Studies in Philosophical Linguistics Series one*; Illinois.